ソラノオトニモ

サイルレン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ソラノオトニモ

【Ｎコード】
Ｎ２０８９Ｒ

【作者名】
サイルレン

【あらすじ】
景色を題材に、小さな放浪の旅で見つけた言葉と気持ちと。貴方は何処を思い出しますか？そこは、大切な場所ですか？・・・・・・
〔ｃａｐｒｉｃｃｉｏ〕Ｓｍｉｌｅ　Ｊａｐａｎ参加作品です。

追うもの（前書き）

Ｂｉｇ　Ｓｋｙ　Ｈｉｇｈからの転用。

追うもの

山の向こうに線が入(い)る。
麓のニンフは川で踊る。
木元のエルフは弦を弾く。
二重三重、幾多も重ねたグラデーション。

背に乗せ舞(おど)るは　薔薇(そうび)の蝶々。
緑(あお)きの草樹に　隠れて昼寝。
黄色の帽子の　少女のわたし、
微睡むままに夢を見ん。

微風に揺れて目覚めれば、
視界に入るは蝶々の背。
煌めく姿を欲しては、
追いかけ追いかけ迷い込む。

青い霧に紛れ行き
紫の雲も覆われて、
河辺のニンフと戯れる
ちっちゃな蝶々（それ）を見つけたの。

にこりと笑った彼女たちに
石飛び　岩越え　駆け寄った。
気付けば日も暮れ　――　此処は何処？
薔薇の蝶々も空の色彩(いろ)。

歌姫～セイレーン～（前書き）

Ｂｉｇ　Ｓｋｙ　Ｈｉｇｈからの転用。

歌姫〜セイレーン〜

胸を打つは、
岩場に腰掛けるセイレーンの歌声。

夜一人きりの小部屋、
目を瞑れば見える御伽噺は
わたしには少々長く。
紡ぐ声はやがては旋律に乗り、
この耳をするりと通り抜けていく。

柔らかい弦楽の音色は、
あの日旅した景色を見せた。
わたしは変わらない。
記憶の中の景色も変わらない。
石畳は今もあのお店に続くのか。

口に含んだ珈琲の苦さは未だ慣れず、
大人になりきれない心は苦笑しか出来なかった。
白波の立つ海原を見下ろし
片手には紅茶でも持ってみて、
白い家のバルコニーに。

遠く遠くから聞こえる澄んだ音は、
わたしを通り越して――
赤煉瓦も突き抜けて――
ぐるりと世界を一巡する。

人々の賑わいの声は耳を擽る。
忙しなく行き交う足に迷い込む猫のように、
わたしもこの人混みに紛れ
迷ってしまったようだ。

けれどまた聞こえる歌声は、
いつの日かに聞いたあの話の声ではなかったか。
道を示すように流れる音符に、
無意識的についていく。
そして、わたしは何処に着いたのだったろう。

光で輝く中の花弁の赤（ロッソ）、
匂いに付いた色は緑（ヴェルデ）、
岩場を取り囲む反射する青（アッズッロ）と、
その岩場で微笑む歌姫（セイレーン）。
わたしはただ静けさに溶けていた。

歌は途切れることを知らず、
何処までも昇華する。
爪先が反対を向けば背中を押す。
わたしはついと進んでいく。

歌姫よ――わたしの歌姫、
どうかいつまでもそこで歌っていて。
巻くことを知らぬ記憶に留まって、
昔伝え聞いた物語を綺麗のまま、
泡となって消えゆくまで。

歌姫よ――わたしの歌姫。
石畳で踊るわたしの為に、
ひとつ歌ってはくれないか。
――わたしの歌姫よ。

Dreamin' Bell（前書き）

Big Sky Highからの転用。

Dreamin' Bell

見えなくなった大空の色、
今は蒼ですか？

遠くで鳴り響く鐘の音は
絶えず僕を呼ぶ。

諦めた道も
捨てきれない夢も
全部抱いて此処まできた。

途中で置いてきた革の鞄には、
愛想を尽かした思い出を詰めて。

あの光輝く教会に届くだろうか
この足も、この手も
この想いも。

ボロボロのただの布切れを纏って
それを綺麗な洋服に幻で魅せる。

嘘も真実に、
涙も笑顔に。

見えない翼は今大きく広げ
そして羽ばたく。

純白なのか漆黒なのかは分からないけれど、
そんなもの関係ないと言って。

背伸びだって構わないだろう？
表情の見えない僕に問いかければ
笑った気がしたのは気のせいか。

僕の後ろを付いて来る僕と手を繋ぎ、
鐘の音を頼りに進んでいく。

空気が揺れるのを合図に、
昔見た情景を手掛かりに。

見えなくなった鐘の色は、
今も黄金ですか？

道（前書き）

Ｂｉｇ　Ｓｋｙ　Ｈｉｇｈからの転用。

道

ふと思い出せば、懐かしい道、景色。

最近、目の前の景色がぶれることがある。突然に。
それは決まって今は見ること無き場所だった。
慣れた日常なはずなのに、やはり心はまだ慣れてはいないのだろうか。見上げる空も、全く違う様に見える程。
そして今も未来も知ることが出来ないことが寂しく思えた。
幾度も記憶を剥がしたが、長い間の様々な悲しみ喜びが染み付く場所だ。恋しく思って当然なのではあるが。
見えない山や花火や友が目の前を横切っていく。今までに無い程鮮明に浮かび上がる。
あそこの匂いまで感じる。自然の香りから沢山の思いも記憶も甦る。
そこまで愛着があったのかな。
全部置いてきたはずなのにな。
……嫌な過去も全部。
溜め息は馴染んだ、だが見知らぬ街に吸い込まれて消えた。
昔より冷たい空気を吸って、もう戻れないことを強く実感した。

さよならの数は人より多い。
だから私は”馴れ”を得意とした。
でも、それはただの勘違いだったようだ。
私はまだ子供、
そして寂しがり屋で孤独だったんだ。
思い出に囲まれで初めて一人じゃなくなった。

嫌な思い出の方が多くても、それが私を確立していたのだと思うと、
ぽっかりと大きな穴が空いた気がした。

時期外れの粉雪が一粒、そろりそろりと舞降りる。
この場所で初めて迎える冬の到来。
この道はどのように白く染まるのだろうか……？

冬星（前書き）

Ｂｉｇ　Ｓｋｙ　Ｈｉｇｈからの転用。

冬星

初めての冬に見た星は、
感嘆の溜め息を漏らすほど美しい。

見慣れた空とは違うような
そんな表情をした今日の空。
「ああ、こんな表情もするのか。」
初めて知ったかのように納得する。

なんとも言えないような真っ暗闇に、
ポツン、ポツンと一つ一つが
遠慮しながら主張していて、
そのコントラディクション（矛盾）に
思わず「うわあ……」と零した。

開けた窓からは氷点下の風、
それはまるで僕の気持ちも星空も
凍らせてとっておいてくれそうな冷たさで。
僕は不思議と寒くは無かった。

くるりと身体を回転させ、
窓から顔を覗かせ、空を見る。
「昔の場所からはこんなの見えなかった」と独りごちて。

おままごとのように”チャチ”な世界だけど、
思うより素敵かもしれないよと
自分自身に笑って言った。

初めての場所で初めての冬。
頬についと伝う寂しさの粒が、
消えてなくなる前に固体になればいいのにと思った。
その塩辛いレンズには、満天の星空は映されているだろうか。

「もう一度」と窓を開ける。
冷たい風は容赦なく自室を翔(かけ)る。
それの温度は部屋の温度に溶けて、
僕の悲しさは外の景色に溶けた。

初の白い羽が舞うには少し遅いような時期だけれど、
初めての場所で初めての雪も
見れたらいいのにと思う。

あの日手を取った温もりは無くて、
あの日見た微かな星空も無くて、
あの日見えなかった景色も無くて、
あの日の記憶も無くて。
今じゃハッキリとした満天の星空が
ただ広がるばかりだけど、
僕はきっと幸せなんだろう。

たったそれだけのことだけど
この空はそう、
そんな気分にさせる。
淡く瞬く、生命に似た輝きたちは。

再び窓を開ければ、
冬の匂いと共に
消えたはずの記憶が戻ってくる。

憧れの里（前書き）

Ｂｉｇ　Ｓｋｙ　Ｈｉｇｈからの転用。

憧れの里

そよ風が緑の草を揺らす
飽くほどの薔薇と
巡らされた蔦
程良い温もりが身体を包む
……此処は、憧れの里

片手に数百年前の詩集
貴方は何を思って書いたのだろう
清い澄んだ空気の中
欲しい言葉を吐き出してきた
……此処から数キロ離れた先で

暗褐色（セピア）な景色に見えたのは
今と変わらぬ故郷（まち）の姿
私には見えない何かを
敏感に感じとったのだろう
……撓（たわ）わに実った果実の下で

遠くまで続く寂しげな道は
小さな町を通り抜ける
今は未だ帰るまいと
私も故郷に想いを馳せる
……古ぼけた小さなブランコの上で

闇雲に探すのではない、ぼーっと空を見ていたら
貴方の見ていた言霊が見えた気がした
すぐさま筆取り写してみたら
息を呑むほど美しい妖精
……あら、此処で何をしているの？

水の音と木の葉が擦れる音
知らない音も言葉も場所も沢山あるから
直ぐにまた見知らぬ町へ
私は永久の旅人
……其処は、憧れの里

雲と天馬と青空の私（前書き）

Ｂｉｇ　Ｓｋｙ　Ｈｉｇｈからの転用。

雲と天馬と青空の私

生温い風が勢い良く
真っ白で重たそうな雲を押す
私の首は上を向き
俯くことを知らない

冬にしては暖かい日
春にしては早すぎる日
それでも春の先走りを感じて
梅より先に愛しさが胸に咲いた

「貴方は青空だ」と
内心訳の分からぬ喩えに苦笑する
君はどうも突拍子の無いことを
口にする傾向にあるようだ

だけどそれは私にとっては
双無き嬉しいものという
何とも可笑しな矛盾（コントラディクション）
嗚呼、風が強い

この風の強さを
最後に感じたのはいつだろう

それは何処にいたときだろう
もう一度をこの風程強く望んでいる

少し冷房の効いたバス
互いに干渉を持たない空間
窓から見える大袈裟な木の揺れが
まるで私の無関心(アパシー)を叱ってるよう？

きっと今頃君は
この風を受けて苛立っているかな
己の大切な人たちと繋がる空に
繋がらない言葉をぶつけてみる

「あの雲はなんの形？」なんて
私は天馬(ペガスス)にしか見えないよ
運命に口出しする
心安い神託(オラクル)に居るような

空調の匂いに思考を邪魔されて
早く外に出させてくれと
無言のままに願ってる
私の願いは自由な青空

天翔る馬の居る広い空。

雲と天馬と青空の私（後書き）

以上がＢＳＨから移動させてきた詩です。
テーマが恋愛と景色とで分けさせてもらいました。

peace

「静けさ」
或いは
「平和」

外に出れば、どうも考えられないような日常？
静けさが昼を包んで、春を待てぬ香りが漂ってくる。
昼なのにね、どうしてここまで静かなんですか、今日は。

遠くで誰かが呼んでいるような。
だけど僕は行けないのです、と微笑んで答える。
だってまだやることがあるのです。

極簡単に、ひとことだけ言ってしまうなら
「ｐｅａｃｅ」は矛盾している。
でもほら、目の前で草木が揺らいで
ゆらり　ゆらり
これこそ「ｐｅａｃｅ」なんでしょうと。
静かに、でも平和に。

僕らが望むのは騒がしさなんです。
それはそれは楽しいくらいの騒がしさ。
じゃあ僕が、歌って差し上げましょう。
僕が、弾いて差し上げましょう。
さあ、踊り狂えと。

誰の声か分からぬ。
それもまた好い。
暗闇に埋もれた生命を助けるために、
僕は暖かな風を起こして吹き飛ばしましょう。
声も、闇も。

窓から顔をだして、変わらぬ景色を見つめて、
奈何せん、と取りこぼした声を掬って、
花の肥料にと振りかければ
綺麗な花が咲くだろうか。

桃色の花びらが少し枝に付いているだけで、
こんなに穏やかに見えるものかと
僕はそっと笑うのです。

春、早くこい。
じゃなけりゃ僕の冬眠が解けまい。
生まれた日を望むために、
さあ早く、僕を咲き誇らせろ。
そうやって何年目の春を迎えるのです。

スーパーフルムーン

真っ黒な空に沈む真白な真珠
本来は厭な染みも
今日はどこか寂しさを伝える付加価値(オプション)
そんな私は目が冴えて

オルゴールを後ろで流しながら
飽きないのだなあ
この未知の空を思いやるのは
珍しいと云われる姿は確かで

見上げた私の居る部屋は
強い光に照らされて明るい
まるでいつもの目の前の建物の
眠らないネオンのようだ

眠らないそれすら今日だけは
あの神々しい光に譲って
身なりを潜めているのだろう
静寂を切り裂くあの光の為に

決して飽きることなどないのだ
冷たい空気が薄い硝子を伝って
私を取り巻く存在となっても
私は此処から動くことなど出来ないのだから

手を伸ばせば普段のそれより
遥かに近く届くように感じられる
けれども私には想像もつかない程
遠く規模(スケール)の違うもので

見つめ続けていれば
冬の曲のオルゴールは止まっていた
もう一度巻いて再生させる
幻想を思わせる曲だった

力強い光の鼓動は今
何処まで届いて
何処まで照らしているのか
隅々まで照らして欲しいと願う

人々が心に何かを持って
その真珠のような月を見上げたなら
その願いと想いを一身に背負って
一心にする力を持つんだ

小さな光でも確かな光は
必ず私たちを導くから
私は何処までもついていこう
私の信じる真珠に

そして何処までも照らすよう

私の信じる真珠が

ソラノオトニモ

ソラノオトニモ。

ワタシは何を見出しただろう。
特に何も考えず、
ふらふらとただ歩いていた毎日。
そこには必ず空があるなんて気障なセリフ。

ソラノハテニハ。

何があるのだろう。
手を伸ばしても、
望遠鏡を使っても、
なんにも見えないけど。
きっとそこには美しいものがあるのだろう。

ソラノイロニモ。

表情が豊かでワタシは嫉妬してしまう。
泣くことも笑うことも怒ることも、
人間のワタシより容易くやってのける。
ワタシは”できそこない”なのかしら？

ソラハイツデモ。

貴方を見ているんだって。
そう誰かが言っていたっけ。
見られたくないときもただ黙って見ている、
ありがたくも五月蝿い存在。

ソラノカタワラ。

ワタシは昔を思い出しながら歩く。
コンクリートに反射した陽の光が、
この身を強く焦がしている。
だけどそれは懐かしいから心地よい。

ソラノオトニモ。

じっと静かに耳を傾ければ、
きっと何かが聴こえるはずだ。
身体中の神経を尖らせて、
ソラノオトを吸収する。

オワリノオクカラ。

ソラノオトニモ（後書き）

完結させました。
暫くのあいだお付き合いいただきありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2089r/

ソラノオトニモ

2011年8月29日17時01分発行